令和7年度 学 校 関 係 者 評 価 報 告 書

評価点

	自己評価		学校関係者評価
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校(園)名：広島大学附属中・高等学校

分野	重点目標（評価項目）	年度計画（中期計画・中期目標）との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価 達成状況、改善策	評価	学校関係者評価 意 見 ・ 理 由	評価	学校関係者評価を踏まえた改善策
学校運営	学校運営	【学部・研究科等と連携、実践的な実習・研修の場の提供、全国・地域における先導的な教育モデルの開発、成果を展開することで学校教育の水準の向上を目指す。】	①研究組織と校務分掌組織との連携を強化し、教職員間で学校が目指す教育ビジョンの共有に努める。 ②安全で安心できる学習環境を整備するため、計画的に予算を執行する。	①短期的および中長期的なビジョンを共有するため、運営委員会・校務分掌会・教科会・学年会等をそれぞれ週1回開催する。 ②教科や分掌等からの要望を反映させながら、全国・地域に対して先導的なモデル校となれるよう投資する。	①運営委員会や分掌会等の諸会議を原則として週1回開催し、SSH事業を中核とした研究開発と日常的な教科指導や探究活動を連動させることができた。 ②今年度末までに校内のトイレが完全に洋式化できる見通しとなった。また、老朽化してきた研修館について、新たな発想で効果的な学習空間をつくりだすことを検討中である。	B	学校長のリーダーシップのもと、適切な学校運営がなされている。施設・設備などの環境整備を進めることや働き方改革で教員の負担軽減をはかってほしい。	A	校長・副校長を中心として各分掌の部長・主任から構成される校務運営委員会での議論を活性化させ、学校のビジョンが教職員間で共有できるよう、さらに努力する。また、学習環境・職場環境の整備に引き続き努める。
	人材育成	【学部・研究科等と連携、実践的な実習・研修の場の提供、全国・地域における先導的な教育モデルの開発、成果を展開することで学校教育の水準の向上を目指す。】	広島県や他県からの交流教員が研鑽を深められる環境を提供するとともに、本校で勤務する教員が外部研修に積極的に参加する機会を保障し、職能成長を推進する。	ミドルリーダーとなるべき人材が中央研修をはじめとする外部研修やセミナー等に参加している。また、教科教育においては、研修会に参加するだけでなく、学会で発表したり、研修会の講師を引き受けて、資質能力の伸長をはかっている。	本校の将来を担う教員が広島県中堅教諭等資質向上研修の受講は勿論のこと、本学のミドルリーダー研修へ参加したり、交流教員を含む複数名の教員が中央研修を受講した。また、すべての教科において多くの教員が学会参加・発表等を行い、主体的に職能成長を図っている。	A	若手教員の増加に伴い、ミドルリーダーの役割がより重要になっている。中堅教員の研修の機会を充実させることを期待する。	A	学校経営目標や目指す学校像を全教職員で共有しながら、若手教員が積極的に校務運営に参画できるようなサポート体制を構築していきたい。
	広報・発信	【学部・研究科等と連携、実践的な実習・研修の場の提供、全国・地域における先導的な教育モデルの開発、成果を展開することで学校教育の水準の向上を目指す。】	①教育研究大会の開催やWebページの活用等により、先導的な教育実践を発信する。 ②入学希望者に対する広報活動を充実させて志願者数の増加に努める。	①教育研究大会、SSH成果発表会を開催し、研究紀要等を刊行する(Web公開を含む)ことにより、研究成果を発信している。 ②学校説明会、学校案内を工夫して入学希望者に対して様々な情報を提供している。	①SSH事業に関連した実践や成果物をはじめとして、教育研究大会の記録、授業実践事例等、中等教育に関する実践研究の成果をWebページを中心に広く発信している。 ②高等学校の学校説明会は6月と9月に各1回開催し、6月約460名、9月約200名の参加があった。中学校の学校説明会は9月に4回開催し、約1500名の参加があった。事後アンケートにでは肯定的評価が95%であり、在校生による校内ツアーや学校紹介の評価が特に高かった。	B	スーパーサイエンスハイスクール関連の事業においては、学校HPを中心に外部へ広く発信することができている。また、学校説明会等で学校の魅力を発信するよう努力しており、引き続き受検生の増加に努めてほしい。	A	科学技術人材の育成は本校に与えられた使命のひとつであり、引き続きSSH事業を推進していく。受検生を増やすことは喫緊の課題であると認識しており、教育内容のさらなる充実が学校の魅力アップに繋がると考えて日々の活動を丁寧に進めたい。
	PTA等の諸組織との連携	【全国あるいは地域における先導的な教育モデルを開発し、その成果を展開することで学校教育の水準の向上を目指す。】	①教育環境を充実させるため、人的支援を中心としてPTA活動を活性化する。 ②主に財政的支援を受けるため、教育後援会と綿密に連携する。	①PTA広報誌を年3回発行して、PTA活動について発信したり、保護者対象の研修会を開催したりする。 ②教育後援会役員会を年3回開催し、参考となる意見を集約し、教育環境の充実に資する予算執行に努める。	①広報誌の発行や研修会の開催だけでなく、全附P連大会・中附P連大会へPTA役員と教員が参加し、他校とも交流した。また、体育祭や文化祭においては、PTA役員を中心とした保護者が学校とともに企画・運営に携わる場面もあった。学校評価アンケートの「学校の楽しさ」に関する項目では、保護者の肯定的回答は91%であった。 ②教育後援会役員会を年3回開催し、全国組織から発信される新たな情報を共有しながら、教育環境の改善に資することができるよう意見交換した。。	A	在校生の保護者や卒業生の学校理解が学校運営には欠かせないものであり、いわゆるPTA活動だけでなく、日常的なコミュニケーションを大切にしてもらいたい。	A	PTA活動が会員の皆様・役員の方々の負担感に繋がらないよう、学校と保護者の距離を縮める機会、保護者同士の親睦を図る機会ととらえて連携を強化していきたい。
教育活動	学習指導	【国際標準の学力を育成するための先導的な次世代カリキュラムの開発を進める。】	①国際標準の学力育成を目指す教育の推進、思考力・判断力・表現力の向上を図る学習活動を充実させる。 ②キャリア教育を充実させることにより、生徒個々の適性に応じた進路実現を図る。	①教科学習と探究活動を往還させながら、コミュニケーション力・批判的思考力等の資質育成を図る。 ②大学・企業・アカシア会等の協力のもと、キャリア意識を向上させることを目指した行事を開催する。	①SSH研究開発における課題研究を中心に、教科を問わず全教員で指導し、授業評価では、授業の理解・内容・評価等に関して、生徒の肯定的回答が89%であった。日本学生科学賞（入選）や日本地学オリンピック（金賞）など、高校3年生が優秀な成績をおさめた。 ②中1～高1を中心に各学年1回以上はキャリア意識向上のための講座を開催することができた。学校評価アンケートでは、進路指導の充実に関して生徒の肯定的回答が81%であった。	A	科学的な内容を中心に探究活動を充実させており、先進的な研究でさまざまな賞を受賞している生徒が増えている点は評価できる。大学や他機関とも連携して引き続き充実させてほしい。	A	専門性の高い科学研究活動を推進する側面と文系・理系を問わず探求活動の望ましいあり方を広く普及させる側面のいずれも重要であると考えており、両面のバランスを考慮しながら、探究活動の指導を行っていきたい。
	生徒指導	【国際標準の学力を育成するための先導的な次世代カリキュラムの開発を進める。】	①生徒が有意義な学校生活を送れるように、生徒会活動を活性化する。 ②社会的ルール遵守や規範意識の向上を図り、安心・安全な環境を整備する。	①生徒会行事を企画・運営する上で生徒の主体性を保障し、生徒自身がやりがいを見出すことができるよう支援する。 ②年3回実施する学校生活アンケートや日々の観察からいじめ等の実態把握に努め、生徒情報を定期的に教員間で共有する。	①生徒会執行部や学校祭運営局の生徒を中心に、リーダーシップを伸長させるよう計画的な指導・支援を行った。学校評価アンケートでは、「学校行事・生徒会活動」に関して生徒の肯定的回答が93%であった。 ②原則として週1回のいじめ防止対策委員会で各学年の状況を把握し、指導方針などを共有した上で、生徒指導や保護者対応を行った。また、必要に応じて、スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー・スクールロイヤーと連携するよう心掛けた。	B	生徒の主体性を重んじた生徒会行事の企画・運営は伝統にもなっており、大切にしてほしい。同時に、学校生活における規範意識の向上も視野に入れて生徒指導を行ってほしい。	A	生徒の自主性や主体性を大切にしながら、教員の負担・負担感を軽減する工夫を検討していく必要がある。また、日常的な生徒指導においては、いじめを起こさせない風土をつくることができるよう教員の意識をさらに高めていきたい。
	保健指導	【国際標準の学力を育成するための先導的な次世代カリキュラムの開発を進める。】	スクールカウンセラー等の専門職を含むチーム学校として、生徒の心身ともに健康な学校生活の実現を図る。	保健室が発行する「保健だより」と生徒会保健委員会による「保健新聞」で心身の健康管理について周知する。また、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと綿密に連携することにより、学年教員を支援する。	年4回発行の保健だよりと年2回発行の保健新聞等を通して、生徒・保護者の意識を向上させるよう努めた。心理的課題を抱えている生徒については、必要に応じて、主治医・学校医・カウンセラー・ソーシャルワーカーと連携して慎重に対応した。また、救命救急講習会で講師から助言を受けたアクションカードについては教室等に迅速に設置することができた。学校評価アンケートでは、「悩みへの相談」に関して生徒の肯定的回答は89%であった。	B	心身に課題を抱える生徒に対して、学校医・カウンセラー・ソーシャルワーカーなど、外部機関と連携して対応することは大切である。多様な相談窓口を設けて生徒をサポートしてほしい。	A	多様な生徒に対応することが求められているので、状況に応じて、外部と適切に連携しながら生徒支援を継続したい。また、生徒の健康・安心・安全が保障される環境整備にも努めたい。

注）□太枠内は、学校関係者評価委員会が記入する。

令和7年度 学 校 関 係 者 評 価 報 告 書

評価点

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校(園)名：広島大学附属中・高等学校

分野	重点目標 (評価項目)	年度計画(中期計画・中期目標)との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価 達成状況、改善策	評価	学校関係者評価 意 見 ・ 理 由	評価	学校関係者評価を踏まえた改善策
教育実習	教育実習	【人間社会科学研究科教職開発専攻(教職大学院)及び教師教育プログラム教員等と教師教育や教員研修・教員養成のあり方について検討する。】	①大学との連携を強化し、教育実習実施の充実に向けて具体的方策を提案する。 ②教育実習生の授業力を向上させ、教職に対する高い使命感を涵養する教育実習の実施に努める。	①年3回の教育実習連絡協議会に出席し、教育実習の成果と課題について意見交流する。全教科で、大学教員の訪問指導を受け、協議を行う。 ②教育実習生が実習後の自己評価において実習の意義を理解し、授業力向上の必要性を認識している。	①教育実習連絡協議会において、教員および実習生のアンケート結果を報告し、成果と課題を共有した。また、円滑な実習実施のために、協議会以外でも大学担当者と連携したり、他附属の管理職員と協議したりした。 ②実習終了後の自己評価において、教科授業力向上や指導体制に関して全員が肯定的に回答をした。	A	教育実習の効率化のために大学等と協議して充実に努めている点は評価できる。教育実習は附属学校の重要な使命のひとつであるので、教員志望の学生を大切に育ててほしい。	A	教育実習指導の充実と教員の働き方改革が相反することのないように、教員のやりがいを伝えられるような教育実習を目指す。
先進的、先駆的な研究推進	研究開発 (スーパーサイエンスハイスクール)	【スーパーサイエンスハイスクール(SSH)事業、研究開発学校としての実践研究、大学教員と連携・協力した教育研究活動等を一層推進する。社会に開かれた科学技術を先導する人材育成の起点となる科学教育カリキュラムの開発等の成果を我が国の初等・中等・高等教育の水準を向上させるために全国に展開する。】	①「イノベーティブな科学技術人材育成の起点となる国際的に通じる科学教育カリキュラムの開発の研究開発」SSH先導的改革型第Ⅰ期3年目の研究開発を実施する。 ②「科学教育カリキュラム」の高度化、国際化にむけて高大連携を推進する。 ③SSH事業による研究開発の成果を広く発信し、普及を図る。	①課題研究を中心とした探究活動を行い、教科における探究と往還させながら、科学教育カリキュラムの開発に努める。 ②課題研究を支援するため、管理機関である広島大学から学生を派遣していただき、連携体制を整える。また、広島大学APを学校設定科目に入れて、高大連携を強化する。 ③主に中国地区のSSH校と情報交換しながら、SSH校に限らず、他校へ成果を広めるよう努める。	①中学校段階の「総合科学入門」から高等学校のSSH学校設定教科「iSAGAs」の諸科目を通して、イノベーティブな科学技術人材の育成を図った。 ②広島大学APを44名の生徒が受講し、大学の授業の面白さや厳しさを経験した。また、理学部から派遣された4名の学生が物理・化学・生物・数学の課題研究をサポートした。学校評価アンケートでは、「SSHの取り組み」に関して、生徒・保護者とも肯定的回答は96%であった。 ③中国地区SSH担当者交流会において、本校の実践報告を行い、他校の管理職員や担当者と意見交換を行った。また、探究活動のガイドブックである「広大メソッド」の内容をもとに、SSSH担当教員が他校の研修会で講師を務めた。	A	SSH関連の事業は多岐にわたり、内容の深化・充実に向けて努力している。さらに発展させるよう期待する一方で、教員の負担も増えていると推察されるので、働き方改革の面からも業務を考える必要がある。	A	スーパーサイエンスハイスクール事業は生徒だけでなく、保護者や社会からの関心も高い。大学との連携や海外との連携を強化する方向で進めていきながら、教員への負担が過剰にかからない工夫を模索していきたい。
	国際交流	【国際標準の学力を育成するための先導的な次世代カリキュラムの開発を進める。研究開発等の成果を我が国の初等・中等・高等教育の水準を向上させるために全国に展開する。】	グローバルマインドの高揚を図り、海外連携校との交流事業を計実施し、アジア科学教育コンソーシアム構築の基盤を構築する。	海外連携校3校(韓国2校、タイ1校)との通常の交流プログラムに加えて、広島において3校が一堂に会して課題研究の交流を行うサイエンスフェアを開催する。	7月にムンサンスオク高校・チョナンチュンアン高校・プリンセスチュラボーンハイスクール・ムクダハン校を招待して「サイエンスフェア2025 in 広島」を2日間にわたって開催することができた。課題研究の発表会だけでなく、特別講義やサイエンスツアーも実施することができ、有意義な時間となった。また、11月・12月・1月には本校の生徒・教員が海外連携校を訪問し、海外で研修を行った。学校評価アンケートの「国際交流」に関する項目では生徒の肯定的回答は85%、保護者は79%であった。	A	3校の海外連携校との交流は参加生徒のモティベーションも上がり、教育効果も高いと思われる。スーパーサイエンスハイスクール事業に限らず、広く国際交流を捉えて活性化することを期待する。	A	コロナ禍以降、時間的制約や人的制約等により、語学研修や異文化体験を主眼とした国際交流は行うことができておらず、生徒・保護者のニーズを分析するとともに、実現可能な形を検討していく必要がある。
	中等教育研究開発	【研究開発等の成果を我が国の初等・中等・高等教育の水準を向上させるために全国に展開する。】	各教科で育成する資質・能力を明確にし、各教科の授業と総合的な学習(探究)の時間」、「課題研究(探究)」との往還について深化させる。	年1回開催する教育研究大会において、授業公開・研究発表・研究協議を行い、授業づくりについて提案する。また、校内研究授業を各教科で年2回以上実施して、他教科の教員とも協議することによって議論を深める。	11月に「カリキュラム・マネジメントを志向した学びの価値の創造(3)―多角的な見方・考え方を育成する探究探究―」を研究主題として教育研究大会を開催し、全国の教育関係者および学生が約400名参加した。また、すべての教科において、年2回以上の研究授業を行い、参観者による研究協議を行った。	A	伝統的に行われている教育研究大会は時代の要請に応えられるものに常に変容しているものと捉えている。参加者を増やすと同時に質的に地域・全国の教育に貢献できるよう努めてほしい。	A	現職教員を対象とした研修、教員志望の大学生や大学院生への啓発など、研究大会の目的は多面的であるが、どのような面に焦点を当てるのか共通認識のもと、研究大会の企画・運営を進めていきたい。
	学部・附属学校共同研究	【学部・研究科等と連携し先導的な教育モデルを開発し、その成果を展開することで学校教育の水準の向上を目指す。】	学部・附属学校共同研究プロジェクトにおいて、本校教員が代表となるプロジェクトに応募し採択を目指す。	本校教員を研究代表とする共同研究プロジェクトに積極的に応募し、1件以上の採択を得る。	令和5年度採択の共同研究プロジェクトは2件(保健、STEAM)、令和6年度採択は2件(ともに保健体育)、令和7年度採択は2件(保健体育、理科)であった。大学教員・他地区の附属学校教員と共同研究を行った。	B	大学教員と共同で教育研究が進められているので、引き続き推進してほしい。	B	教科と大学教員の関係を強化し、日常的に交流ができる状態を構築していく必要がある。
	グローバル教育・ユネスコ教育推進	【国際標準の学力を育成するための先導的な次世代カリキュラムの開発を進める。】	ユネスコスクールとして国内外の機関と連携し、ユネスコ活動を中心となって行う生徒会(ユネスコ委員会)、部(ユネスコ班)の活動を支援する。	ユネスコ協会等が主催する行事に積極的に参加して、ユネスコスクールとしての役割を認識し、校内外へ発信するよう努める。	平和公園碑巡り、慰霊追悼の集い、平和の鐘を鳴らそう等の行事への参加したり、外国人向けパンフレットを作成して連携校の生徒たちを案内したりした。また、ユネスコ班はSDGs関連の競技イベントに参加して、全国大会へ勝ち進むなど活躍した。学校評価アンケートの「環境問題、国際理解、平和学習」に関する項目では生徒の肯定的回答は78%であった。	B	ユネスコスクールとして伝統的に平和活動や環境保護活動などに取り組んでおり、それを維持している点は評価できるので、引き続き継続することを期待する。	A	ユネスコ教育の推進はSSH事業と並んで本校の教育活動の柱となっている。ユネスコ班だけでなく、生徒会活動としてのユネスコ委員の活性化も必要である。

注) □ 太枠内は、学校関係者評価委員会が記入する。